

島立ちアンケートからみた環境認識の基準としての身近な地域

永 迫 俊 郎*

(2019年10月21日 受理)

Local Region as a Perceptual Criterion of Surroundings Based on Surveys of Students in the Amami Archipelago

NAGASAKO Toshiro

要約

われわれ人間は環境を認識するさい自ずと主体を切り替えて考えているが、どうしても自分中心になってしまう。人間は落ち着く先を求めて、自分のふるさと（故郷）、自分の位置、私はどうするのだということを問い続ける。そこで基盤になるのはそれまでに培った経験で、環境世界の見え方が人によって異なるのはそのためである。

鹿児島大学のCOC事業に携わるなかで「島立ち」の重要性に気付き、2017年3月に知名中学生を対象に「故郷（沖永良部島・校区・字）との関わりについてのアンケート」を行った。さらに、2019年7月に大島高校の生徒に対して「郷土・故郷と島立ちに関するアンケート」を実施できた。これらの沖永良部島と奄美大島の生徒に対するアンケート結果にもとづいて、環境世界を認識する基準として「身近な地域」がどのような役割を担っているか検討してみた。その結果、住民のほとんどが一度は島立ちしている周囲の状況や、出身者の郷土会に接してきた経験が、世界認識の基準となる身近な地域と自己の関係性への考究に繋がるのであろうと指摘した。

キーワード：身近な地域，人口移動，郷土・故郷，沖永良部島，奄美大島

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 准教授

I. はじめに

環境は 21 世紀のキーワードといわれながら、様々な意味で使われる場合が多く分野によっては産業廃棄物をさすほどであるが、「主体を取り巻くもの」という簡潔な定義が地理学における捉え方を端的に現している。主体は個人からある人間集団（例えば鹿大生、鹿児島県民、日本人など）、そして全人類さらには地球上の全生物といったように、ミクロからマクロまで切り替えて考えることができる。極端に言えば、脳を主体とみればそれが内包される身体そのものも環境となる。われわれ人間は重層構造をなす主体を自ずと切り替えながら、対象とする事象に適した時空間スケールで環境世界を把握できてしかるべきである。ところが実際のところ、個人のエゴや集団心理、国益の優先などによって、うまく運ばないのが人間世界の常である。自らを中心に据えて考えるという構造上致し方ない反面、知識や知恵を蓄積し継承してきた人間だからこそ、ベストとはいかないにしても次善の立ち居振る舞いができるように変化してきていると筆者は若干楽観的に思っている。地球環境では自己中心主義から脱却できないため、人間社会自体をサブシステムとして客観的に捉えようとする地球システムが提唱されてからしばらく経ったが、あまり状況に変化はみられない。個人々の成長の過程からみても、主体の束縛から解放される日が来るのか筆者には不明である。

落ち着く先を求めて問い続けるのが人間であるという堀(2015)の次の指摘は言い得て妙である。「人間は自らの生活経験を通して環境世界を感知し、さらなる周辺世界に関心を向け既知の世界と新たな世界との整合性を吟味し、認識世界は再構成される。不断に続くこの過程を通して、人間は認識世界の充実をはかり、人間の落ち着く位置を希求して止まないように見える。自分のふるさと(故郷)、自分の位置、私はどうするのだ、ということ問い続けることによって、人間は落ち着くのであろう。」

ところで、鹿児島大学は国立大学法人が掲げる 3 つの機能のうち地域の拠点を選択し、平成 26 年度から 5 年間 COC (Center of Community) 事業を行った。地域を主要な関心事とする地理学の立場から、筆者も携わるなかで「島立ち」の重要性に気付いた。沖永良部島のジッキョヌホー(知名町瀬利覚)と薩摩半島の清水の湧水(南九州市川辺町)を比較検討した永迫(2017)において、沖永良部では島を一度離れることで故郷を客観視できその素晴らしさを実感できるのに対し、川辺では鹿児島市に比べると不便などこにでもあるような田舎としてしか捉えられないことを指摘した。

墓正月の調査でお世話になった今井力夫氏(当時は知名中学校校長;現在は知名町長)にご協力いただき、2017 年 3 月上旬に中学生対象に「故郷(沖永良部島・校区・字)との関わりについてのアンケート」を行う好機を得た。平成 29 年度前期の在外研修をはさみ、2 年あまり経過してしまっていたが、ご縁のお陰で 2019 年 7 月下旬に大島高校の生徒に対しても同様のアンケート調査を実施できた。本論文では、これらの島立ちに関するアンケート結果にもとづいて、環境世界を認識する基準として「身近な地域」がどのような役割を担っているか考えてみたい。「郷土」研究会編(2003)で議論されたように郷土と故郷には明瞭な相違があること、大島高校には島立ち後の生徒もいることから、小学校社会科で最初に対象とする身近な地域を本稿では郷土・故郷の意味で用いている。

II. 知名中学校の全校生徒へのアンケート調査

沖永良部島は知名町と和泊町の2町からなる。それぞれの町の公式ホームページによると令和元年10月1日現在、知名町の人口は5,904人（男性2,985；女性2,934）、世帯数3,051世帯、和泊町の人口は6,551人（男性3,245；女性3,306）、世帯数3,332世帯である。和泊の方が1割ほど人口が多いものの、ほぼ拮抗した勢力で両町はライバル関係にあるとよく言われる。知名町立中学校には、知名小学校と下平川小学校の校区からなる知名中学校と、田皆小学校・上城小学校・住吉小学校からなる田皆中学校の2校がある。

「私たちは身近な地域から自治体・国さらに大きく地球や宇宙まで、世界を認識しながら生きています。そうした世界認識の基準となっているのは、自分の故郷ならびにこれまでの経験です。地域や世界像を研究対象とする地理学からのアンケートに、ご協力のほどお願いいたします。」と前置きしたA3用紙1枚（資料1）を欠席者を除いた全校生徒に配付（2017年3月7～9日に実施）してもらい、1年1組18枚、1年2組20枚、2年1組22枚、2年2組23枚、3年1組23枚、3年2組21枚の合計127枚を回収した。アンケートの冒頭で、出身小学校と沖永良部島居住歴を尋ね、選択式9と自由記述4の計13問に回答してもらった。

出身小の比率：知名小—下平川小は、1年生50.0%—44.7%、2年生71.1%—22.2%、3年生63.6%—27.3%と学年によってかなりの変動がある。誕生以降ずっと島に居住する生徒は、1年生65.8%、2年生75.6%、3年生77.3%と高く、極端に居住歴の浅い生徒は親の転勤に伴うものと解釈可能である。

表1に沿って項目ごとの特徴を記載する。どの階層で故郷を捉えているか問うた(1)の回答は、<1>沖永良部島64.6%、<2>鹿児島県10.2%、<3>知名町9.4%、<4>日本8.7%の順で、最も身近な地域である字/集落名は3.1%に過ぎなかった。選択肢から一つを選ぶのではなく、「人による」と明記し、字<知名の人>、知名町<えらぶの人>、沖永良部島<かごしま本土>、鹿児島県<日本人>、日本<外国人>と括弧書きした3年生の答えは主体の重層構造を理解しており、正に完璧で度肝を抜かれた。いつ島立ちするかを尋ねた(6)では、<1>大学/専門学校入学の時44.5%、<2>高校入学の時32.7%、<3>就職の時18.1%、<4>島を離れるつもりはない4.7%の順で、実際に平成29年3月卒業の3年生46名中14名が島外に出て、それ以外の生徒は一島一校の県立沖永良部高等学校（沖高：オキコウ）に進学した。島へのUターン希望時期(10)は、<1>10-20年後33.1%、<2>仕事を定年退職してから28.3%、<3>Uターンしない22.8%、<4>島で就職できたらすぐに15.7%となった。あなたと島を結びつけているもので最も強力だと思うのはどれかを問うた(11)では、<1>家族53.9%、<2>友だち21.7%、<3>自然16.5%と続き、土地や墓は低調だった。

表1の列に相当する1位～4位の順位は全学年での合算値で算出されている。大勢に影響を与えるほどではないものの、学年ごとに変動があるのは確かである。果実の表年/裏年に類似した波があるだろう点と、卒業式を間近に控えた時期だったため3年生の回答が現実味を帯びている点の2点の可能性を指摘しておきたい。

資料 1 知名中学校へのアンケート書式

故郷 (沖永良部島・校区・字) との間わりについてのアンケート

2017年3月実施
鹿児島大学 水田俊郎

私たちは身近な地域から自治体・国さらに大きく地球や宇宙まで、世界を認識しながら生きています。そうした世界認識の基礎となっているのは、自分の故郷ならびにこれまでの経験です。地域や世界像を研究対象とする地理学からのアンケートに、ご協力をお願いいたします。選択肢をのぞいて、自主は自由記述で回答してください。

学年 () 年 出身小学校名 () 沖永良部島居住歴 () 年

(1) 「あなたの故郷はどこですか？」と尋ねられたら、どのように答えますか？最も近い選択肢を選んでください。

ア 字無署名 イ 知名町 ウ 沖永良部島 エ 奄美 オ 薩球 カ 鹿児島県 キ 日本

(2) 中学校に入学した当初、自分の出身小学校以外の同級生とどれ位で仲良くなれましたか？最も近い選択肢を選んでください。

ア すぐになれた イ 少し時間がかかった ウ かなり時間がかかった エ まだなれていない

(3) 中学校の校区のなかでの自分の出身小学校区の特徴は、どのように表現できるか以下の選択肢から最も近いものを選んでください。

ア 最も子ども数が多い イ 最も速く離れている ウ あまり特徴がない エ みんな顔見知り

(4) 自分が住んでいる字無署名の特徴は、次のうちのどの側面が最も影響していると思いますか？最も近い選択肢を選んでください。

ア 自然 (地形、気候) イ 産業 (農業、商業) ウ 住んでいる人々 エ 歴史・伝説

(5) 自分が住んでいる字無署名についてよその人に説明するとき、欠かせない存在は何ですか？自由に記述してください。(例えば、瀬田屋のジツキョヌホーなど)

(6) いつ鳥立ちする予定ですか？最も近い選択肢を選んでください。

ア 高校入学の時 イ 大学専門学校入学の時 ウ 就職の時 エ 鳥を獲れるつもりはない

(7) (6)の回答がエ以外の方はお答えください。鳥立ちした後どこに住みたいですか？最も近い選択肢を選んでください。

ア 奄美群島内 イ 鹿児島県本土 ウ 沖縄県 エ 阪神地区 オ 京浜地区 カ その他

(8) (6)の回答がエの方はお答えください。鳥を獲れないで、どんな職業に就きたいと考えていますか？自由に記述してください。(例えば、ケーピングガイドなど)

(9) 鳥立ち後、どの位の頻度で里帰りしたいですか？最も近い選択肢を選んでください。

ア 一年に3回以上 イ 一年に2回 ウ 一年に1回 エ 数年に1回 オ たぶん帰らない

(10) 鳥立ち後、どの位遊ばせたらUターンしたいですか？最も近い選択肢を選んでください。

ア 島で就職できたらすぐに イ 10-20年後 ウ 仕事を定年退職してから エ Uターンしない

(11) あなたと鳥を結びつけているもので、最も魅力だと思うのは次のうちのどれですか？最も近い選択肢を選んでください。

ア 家族 イ 土地 ウ 暮 エ 友だち オ 自然 カ その他 (自由記述:)

(12) あなたにとって、故郷はどんな存在ですか？自由に記述してください。

(13) 最後に、あなたの夢を自由に書いてください。

* 二能力ありかどうかございました。アンケートの回答内容について知人情報に関する分析は行わないことを申し添えます。

表1 知名中学校生徒へのアンケート調査のうち選択式回答7項目についての全学年および学年ごとの集計結果

選択式の問い	全学年での1位回答			全学年での2位回答			全学年での3位回答			全学年での4位回答					
	1年生のみ	2年生のみ	3年生のみ	1年生のみ	2年生のみ	3年生のみ	1年生のみ	2年生のみ	3年生のみ	1年生のみ	2年生のみ	3年生のみ			
(1) 故郷の階層	24(63.2%)	32(71.1%)	全 82(64.6%)	<2>鹿児島県	4(10.5%)	6(13.3%)	全 13(10.2%)	<3>知名町	4(10.5%)	3(6.7%)	5(11.4%)	<4>日本	4(10.5%)	3(6.7%)	4(9.1%)
(4) 字/集落の特徴	<1>住んでいる人々	15(39.5%)	17(37.8%)	全 51(40.2%)	<2>産業(農業・商業)	11(28.9%)	15(33.3%)	全 35(27.6%)	<3>歴史・伝統	7(18.4%)	9(20.0%)	<4>自然(地形・気候)	5(13.2%)	4(8.9%)	7(15.9%)
(6) いつ島立ちする	<1>大学/専門学校入学の時	16.5(43.4%)	19(42.2%)	全 56.5(44.5%)	<2>高校入学の時	12.5(32.9%)	15(33.3%)	全 41.5(32.7%)	<3>就職の時	7(18.4%)	9(20.0%)	<4>鳥を離れるつもりはない	2(5.3%)	2(4.4%)	2(4.5%)
(7) どこに住む	<1>鹿児島県本土	10(27.8%)	20(46.5%)	全 41(33.9%)	<2>その他	8(22.2%)	6(14.0%)	全 27(22.3%)	<3>阪神地区	3(8.3%)	10(23.3%)	<4>沖縄県	5(13.9%)	3(7.0%)	7(16.7%)
(9) 帰省の頻度	<1>一年に2回	16(42.1%)	17(37.8%)	全 49(38.6%)	<2>一年に3回以上	10(26.3%)	13(28.9%)	全 35(27.6%)	<3>一年に1回	8(21.1%)	8(17.8%)	<4>数年に1回	2(5.3%)	7(15.6%)	4(9.1%)
(10) Uターンの時期	<1>10-20年後	9(23.7%)	18(40.0%)	全 42(33.1%)	<2>仕事を定年退職してから	13(34.2%)	14(31.1%)	全 36(28.3%)	<3>Uターンしない	8(21.1%)	9(20.0%)	<4>島で就職できたらすぐに	8(21.1%)	4(8.9%)	8(18.2%)
(11) 結びつけているもの	<1>家族	24.5(64.5%)	23(51.1%)	全 68.5(53.9%)	<2>友だち	6(15.8%)	7.5(16.7%)	全 27.5(21.7%)	<3>自然	4.5(11.8%)	10.5(23.3%)				

* 2017年3月7～9日に知名町立知名中学校の全校生徒(欠席者を除く)対象に実施され、1年生39名・2年生45名・3年生44名の計127名から回答が得られたアンケート調査による

III. 大島高校の出前授業受講生へのアンケート調査

鹿児島大学は県内島嶼地域からの進学者を増やそうと施策を講じ始めている。その一環として、テレビ会議システムによる出前授業も発案され、本年度は鹿児島県立大島高等学校（大高：ダイコウ）を対象に試験的に実施されている。各学部から1名は出講するよう教務委員会を通じて依頼があったが、自主的に手を挙げてくださる教育学部の先生がおられず、教務委員が引き取る形で2年目委員の筆者が担当する運びとなった。知名中学校でのアンケートの記憶から、授業テーマは「島立ちをひかえた高校生へ」とし、備考で郷土・故郷と島立ちに関するアンケートをお願いしてみた。知名中学生対象の書式（資料1）を、奄美大島ならびにより広範囲から生徒が集まる高校に適用させたのが「郷土・故郷と島立ちに関するアンケート」（資料2）の書式で、前もって本学の教務課の担当者にメール送信していた。

出前授業の第3弾として2019年7月29日の13時半から50分の予定で、授業を始めたところ、大高の担当教師が偶然にも教育学部社会専修の卒業生だった。そもそもテレビ会議システムを利用するのは初めてで緊張していたのが一気に解れ、彼の方も力が抜けたのか、最後には校歌を全員で合唱してくれ授業時間は60分を超えた。試行元年ということで、筆者にも「テレビ会議システムを利用した出前授業についての意見等【講師用】」というアンケート用紙が渡され、受講生には「テレビ会議システムを利用した出前授業アンケート【受講生用】」が配られた。35名の受講生は同日これと資料2の2種類のアンケートに回答してくれた。35名の内訳は1年生1名、2年生11名、3年生23名である。

奄美大島・喜界島・加計呂麻島・与路島・請島・徳之島・沖永良部島・与論島の有人8島からなる奄美群島の中心は奄美大島の名瀬である。旧名瀬市は2006年3月に笠利町・住用村と合併し、奄美市になった。奄美市公式ホームページによると、令和元年9月末日現在の総人口は43,307人（男性20,806；女性22,501）、総世帯数23,868世帯で、旧名瀬地域の人口は36,487人で84%を占めている。奄美群島で約11万人なので、約3分の1が名瀬に集中する形である。これを反映して、大高は奄美群島屈指の進学校といわれる。実際35名中2名は喜界島の出身で、名瀬以外の出身者（自宅から通学しているか否かは不明）も少なくない。

表2に沿って項目ごとの特徴を記載する。どの階層で故郷を捉えているか問うた(1)の回答は、<1>奄美大島71.4%、<2>市町村名17.1%、<3>字/集落名5.7%で、小学校校区名と鹿児島県はそれぞれ1名が答えたのみである。いつ島立ちするかを尋ねた(6)では、<1>大学/専門学校入学の時97.1%、<2>既にしている2.9%で、他の回答はなかった。鹿児島大学の出前授業を自ら受講する生徒が全員進学希望なのは当然かもしれない。喜界島出身のもう一人は奄美大島を島立ちと解釈したと考えられる。島へのUターン希望時期(10)は、<1>10-20年後42.9%、<2>仕事を定年退職してから34.3%、<3>Uターンしない14.3%、<4>島で就職できたらすぐに8.6%となった。あなたと島を結びつけているもので最も強力だと思うのはどれかを問うた(11)では、<1>家族62.9%、<2>自然20.0%、<3>友だち11.4%と続き、土地とその他（自由記述：島の雰囲気）はそれぞれ1名が答えたのみである。

資料2 大島高校へのアンケート書式

郷土・故郷と島立ちに関するアンケート

2019年7月実施
鹿児島大学 永迫俊郎

私たちは身近な地域から自治体・国さらに大きく地球や宇宙まで、世界を認識しながら生きています。そうした世界認識の基準となっているのは、自分の郷土・故郷（ふるさと）ならびにこれまでの経験です。地域や世界像を研究対象とする地理学からのアンケートに、ご協力のほどお願いいたします。選択肢名の空白は、または自由記述でお答えください。

学年 () 年 出身小学校名 () 出身中学校名 ()

(1) 「あなたの郷土・故郷はどこですか?」と尋ねられたら、どのように答えますか?最も近い選択肢を選んでください。

ア 字集落名 イ 小学校校区名 ウ 市町村名 エ 奄美大島 オ 鹿児島県 カ 日本

(2) 高校に入学した後、自分の出身中学校以外の同級生とどれ位で仲良くなれましたか?最も近い選択肢を選んでください。

ア すぐになれた イ 少し時間がかかった ウ かなり時間がかかった エ まだなれていない

(3) 中学校に入学した後、自分の出身小学校以外の同級生とどれ位で仲良くなれましたか?最も近い選択肢を選んでください。

ア すぐになれた イ 少し時間がかかった ウ かなり時間がかかった エ 最後までななかった

(4) 自分が住んでいる字集落の特徴は、次のうちのどの側面が最も影響していると思いますか?最も近い選択肢を選んでください。

ア 自然 (地形、気候) イ 産業 (農業、商業) ウ 住んでいる人々 エ 歴史・伝統

(5) 自分が住んでいる字集落についてよその人に説明するとき、不可欠な存在は何ですか?自由に記述してください。(例えば、(例) 名前のアラビヤシヤブ草など)

(6) いつ島立ちする予定ですか?最も近い選択肢を選んでください。

ア 大学専門学校進学の時 イ 就職の時 ウ 既にしている エ 島を離れるつもりはない

(7) (6)の回答がエ以外の方はお答えください。島立ちした後どこに住みたいですか?最も近い選択肢を選んでください。

ア 奄美群島内 イ 鹿児島県本土 ウ 沖縄県 エ 阪神地区 オ 京浜地区 カ その他

(8) (6)の回答がエの方はお答えください。島を離れないで、どんな職業に就きたいと考えていますか?自由に記述してください。(例えば、ツアーガイドなど)

(9) 島立ち後、どの位の頻度で里帰りしたいですか?最も近い選択肢を選んでください。

ア 一年に3回以上 イ 一年に2回 ウ 一年に1回 エ 数年に1回 オ たぶら帰らない

(10) 島立ち後、どの程度たららUターンしたいですか?最も近い選択肢を選んでください。

ア 島で就職できたらすぐニ イ 10-20年後 ウ 仕事を定年退職してから エ Uターンしない

(11) あなたと島を結びつけているのもで、最も強力だと感ずるのは次のうちのどれですか?最も近い選択肢を選んでください。

ア 家族 イ 友だち ウ 自然 エ 土地 オ 藝 カ その他 (自由記述:)

(12) あなたにとって、郷土・故郷はどんな存在ですか?自由に記述してください。

(13) 今回の授業で面白い字集落だ「この島の風景」(原風景)を簡単に説明してください。

* 二箇所ありがとうございしました。アンケートの回答内容について個人情報に関わる分析は行わないことを申し添えます。

表2 大島高校の出前授業受講生へのアンケート調査のうち選択式回答7項目についての集計結果

選択式の問い	1位回答	2位回答	3位回答	4位回答
(1) 故郷の階層	<1>奄美大島 25(71.4%)	<2>市町村名 6(17.1%)	<3>字/集落名 2(5.7%)	<4>小学校校区名, 鹿児島県 各1(2.9%)
(4) 字/集落の特徴	<1>住んでいる人々 13(37.1%)	<2>歴史・伝統 10(28.6%)	<3>自然(地形・気候) 9(25.7%)	<4>産業(農業・商業) 3(8.6%)
(6) いつ島立ちする	<1>大学/専門学校入学の時 34(97.1%)	<2>既にしている 1(2.9%)		
(7) どこに住む	<1>その他 13(37.1%)	<2>京浜地区 8(22.9%)	<3>鹿児島県本土 7(20.0%)	<4>阪神地区 4(11.4%)
(9) 帰省の頻度	<1>一年に2回 15(42.9%)	<2>一年に1回 9(25.7%)	<3>一年に3回以上 8(22.9%)	<4>数年に1回 3(8.6%)
(10) リターンの時期	<1>10-20年後 15(42.9%)	<2>仕事を定年退職してから 12(34.3%)	<3>リターンしない 5(14.3%)	<4>島で就職できたらすぐに 3(8.6%)
(11) 結びつけているもの	<1>家族 22(62.9%)	<2>自然 7(20.0%)	<3>友だち 4(11.4%)	<4>土地, その他 各1(2.9%)

* 2019年7月29日に鹿児島県立大島高等学校を対象とした「テレビ会議システムによる出前授業」を受講した1年生1名・2年生11名・3年生23名の計35名から回答が得られたアンケート調査による

IV. 考察

1. 特筆すべき回答の評価

「あなたにとって故郷はどんな存在ですか?」との自由記述の問題(12)に対し、「ぼくのアイデンティティーを育ててくれた場所であり、家族・友達・地域の人などぼくを支えてくれる人がいるところ、またどうしても帰りたくなる場所です」と記入した知名中の3年生がいた。筆者の中3時代(始良町立帖佐中学校)を振り返ってみて、たとえ逆立ちしたとしてもこうした適確な返答ができたはずがない。優秀さの決定的な相違もさることながら、境遇の違いが最大の要因と思われる。島民のほとんどが一度は島立ちしている周囲の状況や、沖永良部出身者の郷土会である沖洲会などに接してきた経験が、郷土・故郷の相対化さらに世界認識の基準となる身近な地域と自己の関係性への考究に繋がるのであろう。

沖高だけとはいえ島内で高校進学できる沖永良部島と違って、中学卒業段階で必ず島立ちを迎える甑島、三島村、十島村のような離島もある。平成の大合併に伴って海で隔たれた薩摩川内市に組み込まれた甑島の状況は、島嶼部単独の自治体よりも困難かもしれない。人口減少社会に相応しい地域のあり様や地方創世といった大命題への突破口が、すんくじらの半島先端部や僻遠性・隔絶性の異なる離島などを抱える鹿児島県での比較研究に潜んでいると予見させられた知名中学生対象の島立ちアンケート調査であった。

2. 知名中学生と大島高校生の比較を通して

アンケート回答者の中で知名中学校から大島高校へ進学した生徒がいないため、同一人物をフォローできているわけではないが、調査時期がずれたことで、知名中3学年と大島高校3学年は全く

同一のコーホートである。中学から高校にかけての多感な時期で、価値観や志望が大きく変わっても不思議ではない。ここでは、成長段階ならびに沖永良部島と奄美大島の対比から比較を行うが、大高での調査対象者が数および特性の両面で篩い分けされている点はご了承いただきたい。

シマ社会という観点から奄美群島の字/集落をみている筆者にとって、(1)故郷の階層で表1と表2のいずれでも字/集落名が沈んでいるのは世代間ギャップを感じられる。海で囲まれた閉鎖系の分かりやすさとも通じており、島を以て郷土・故郷との捉え方は納得できるが、奄美大島はいささか大きすぎる気もする。大高生には大島を背負っているとの自負があるのかもしれない。これは居住地の属性（中央—地方，都会—田舎）を反映していると考えられる。大島高校が立地する名瀬は、紛れもなく奄美群島の地域中心地である。

(4)字/集落を特徴づけているものとして、<1>住んでいる人々で共通し、40.2%（表1）と37.1%（表2）と似かよった比率になっていることは注目すべきで、身近な地域への見方はあまり変化せず、興味関心が外部に向かっていているためであろう。沖永良部は農業の島だけあって、産業（農業・商業）が2位にランクしている。

(6)島立ちの時期については、義務教育である知名中の回答（表1）が示唆に富むものである。(7)どこに住むかについては、沖永良部と阪神地区および沖縄県との結びつきが注目される一方で、大高は鹿児島県本土への志向が低いようである。(9)帰省の頻度および(10)Uターンの時期は、順位と比率のどちらもほぼ同調している。Uターンしないと考えている生徒が22.8%いると同時に、就職できたらすぐにも15.7%いるのが（表1）沖永良部の面白い点で、奄美大島より僻遠性が高いためと考えられる。すなわち、一旦島を出ると帰りづらいと思う反面、島への愛情・思い入れが強いのである。

(11)結びつけているものは、表1と表2ともに<1>家族で共通している。高校生になって、自然が相対的に注目されるようになるのは(4)字/集落の特徴でも見受けられる。奄美大島が世界自然遺産への登録をめざしていることも影響しているだろう。

以上、島立ちをひかえた沖永良部島の中学生ならびに奄美大島の高校生を対象に実施した郷土・故郷と島立ちに関するアンケート調査を集計し、比較検討を行った。奄美群島のうち沖永良部島と与論島は琉球文化圏に属し、徳之島と沖永良部島との間に境界があると言われることが多い。奄美群島の人々が「奄美」というまとまりを意識するようになったのは、戦後の米軍統治下からの復帰運動以降だ（斎藤・榎本，2019）。それも行政区分上の大島郡を共有している程度で、それぞれの島の個性が光るといのが筆者の見立てである。もちろん、人口移動も多く他の島に親戚がいたり、またシマに生まれ育ち島立ちをするという経験を同じくするための仲間意識から、往来が盛んなのも確かである。

沖永良部島のジッキョヌホーの調査から、墓正月そして島立ちへと展開をみせている筆者の離島調査にとって、核心となるのはシマ/島に生きる意味の探究である。今回のアンケート結果の共通項に着目すると、時代の制約やPalimpsest（紙以前の書写材料である羊皮紙→消されずに残る痕跡）

の切り合い関係から整理するのが重要と考えられる。日本文化の基層をなす原初形態がまだ残されており、それらが有する将来への糧を発掘すべく、地道な聞き取り調査を丹念に重ねていきたい。

V. おわりに

「奄美にいて良かった、又は嫌だなと思うことが普段からよくあります。しかし、今回の授業で良い面をたくさん感じる事ができた。」これは出前授業のオフィシャルアンケートの「4. 今日の出前授業について、ご感想・ご意見等ありましたらお聞かせください」への大高3年生の回答である。流暢な文章ではないものの、シマに暮らす若者の気持ちがよく表現されている。

日本では人口減少は既定路線でとりわけ地方の将来には暗雲が立ちこめていると言われるのに反して、鹿児島大学のCOC事業をきっかけに何度も通う奄美群島で受ける実感は、疲弊した姿ではなく、活き活きとした地域社会のエネルギーである。利便性の向上と裏腹に失ってしまった能力は数知れず、中央を自認する都市部こそ地域社会の持続性が危惧される現状に対して、離島社会に連綿と継承されているシマの魂が貴重なヒントを与えてくれると確信して、現地調査を重ねるとともに学生巡検で通い詰めている次第である。

平成29年度前期の在外研修をはさみ迅速に取りまとめできなかった点ならびにアンケート内容の吟味が不十分であった点などを反省しつつも、今後の研究展開の萌芽が幾つも見受けられるため、集計結果ならびに意義を本稿で報告した。

引用文献

- 鹿児島県奄美市公式ホームページ <https://www.city.amami.lg.jp/> (最終閲覧日 2019年10月20日)
鹿児島県知名町公式ホームページ <http://www.town.china.lg.jp/kikakushinkou/kurasu/index.html> (最終閲覧日 2019年10月20日)
鹿児島県和泊町公式ホームページ <http://www.town.wadomari.lg.jp/> (最終閲覧日 2019年10月20日)
「郷土」研究会編 (2003) 「郷土—表象と実践—」, 嵯峨野書院, pp. 272
斎藤 憲・榎本喜一 (2019) 「奄美 日本を求め、ヤマトに抗う島—復帰後奄美の住民運動史—」, 南方新社, pp. 318
永迫俊郎 (2017) 集落の中心としての湧水の役割: 清水の湧水とジッキョヌホーの比較研究. 日本地理学会発表要旨集, 92
堀 信行 (2015) 自然認識の多様性を考える—サンゴ礁地域からアフリカまで—. 岩手大学地域防災研究センター第7回地域防災フォーラム「自然と共生する人間 多様な自然観と災害文化」講演録, 59-84